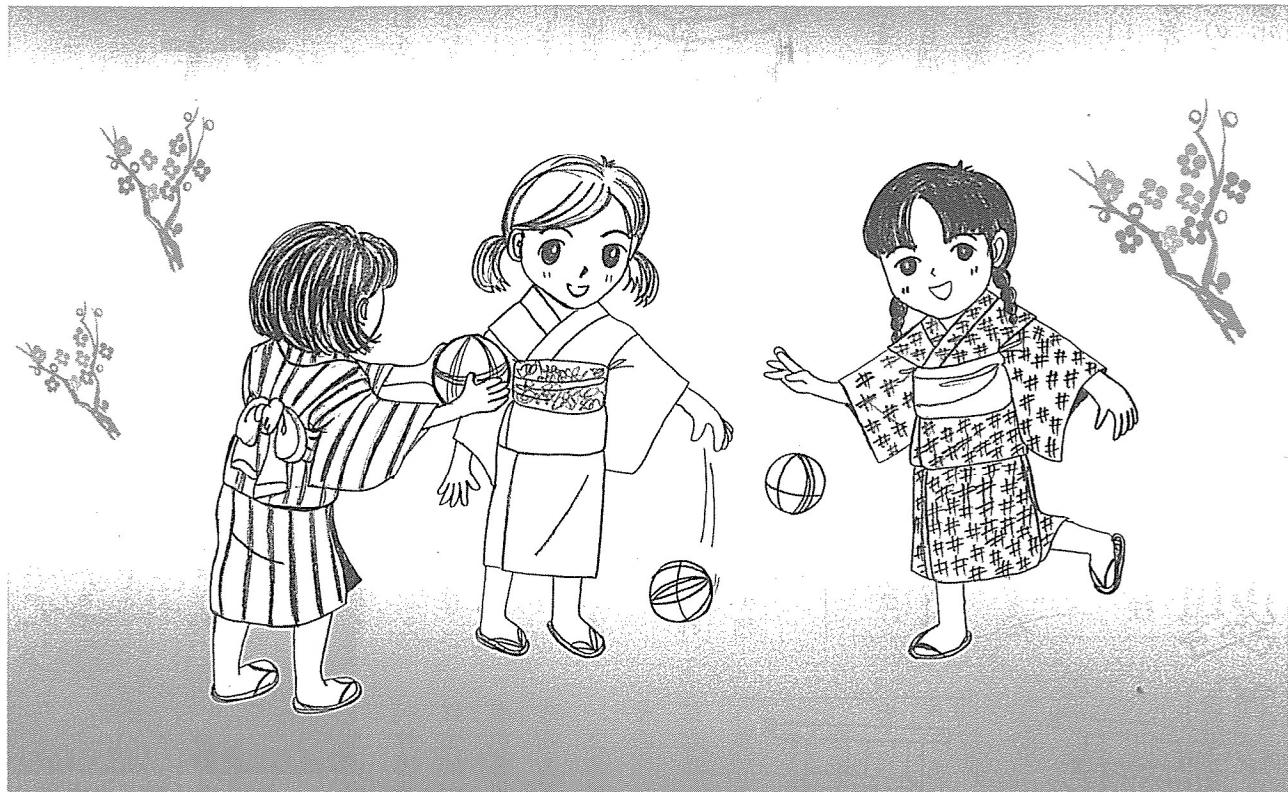


生活の伝承 13

発行者 民家園のつどい
会長 斎藤久一
発行所 福島市五老内町3番1号
福島市教育委員会文化課内
民家園のつどい事務局
TEL(024) 535-1111 内線5373



「まりつき」うた

一でかつ花

二で玉椿

三で下り藤

四で獅子ばたん

五つ入山がんけのつつじ

六つ紫ききょうの花よ

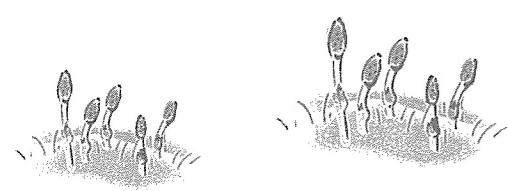
七つ南天

八つ山吹よ

九つ小梅がぴらつと咲いた

十で殿様一本かしました

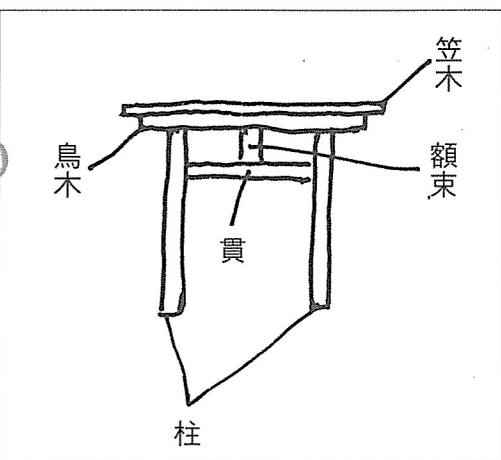
このわらべうたは福島市内の吉井田地区で採集したもの
です。一句でまりつきを三度できたといいますが「五つ
入山がんけのつつじ」などは七度もついたようで、それ
がそれぞれの地方でつき方がちがっていたように思われ
ます。がんけはかけのことです。



神社の境内に入る時、くぐつて行く鳥居は特異な木組みで人の目を引く。殊に稻荷社のある境内の入口にある赤い鳥居はきわ立つて目につく。

鳥居は神社の境内に入る門とも考えられ、神域への入口——玄関の構造とも考えられる。古くから、身のけがれをもつ者は、ここから神域に入ることは禁ぜられ、止むなく入るときは、この鳥居をさけて通ることがあつたといふ。

祭禮などの時などこの鳥居をくぐつて神社に詣るときは、身も心も清らかにして通るのがよいとして、晴着をきて、口をすすぎ、手を清めてから入つたのである。



鳥居は神社の境内に入る門とも考えられ、神域への入口——玄関の構造とも禁ぜられ、止むなく入るときは、この鳥居をさけて通ることがあつたといふ。

神社の境内に入る時、くぐつて行く鳥居は特異な木組みで人の目を引く。殊に稻荷社のある境内の入口にある赤い鳥居はきわ立つて目につく。

まず、鳥居についての各部の名称をみると

柱　|| 鳥居の中心となる二本の柱
鳥木　|| 二本の柱の頂上に乗つてゐる横木

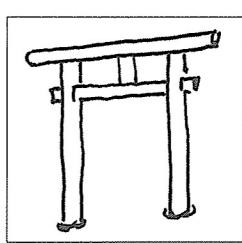
貫　|| 鳥木の下にある横木で、二本の柱を支えているもの

額束　|| 鳥木と貫と中ほどにつけられる木

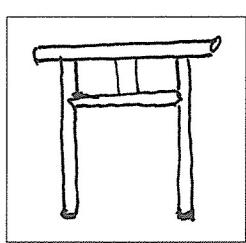
笠木　|| 鳥木の上に乗せてある木

鳥居の材料は、木が多いが、永く保持するために、石材が用いられ、中に金属が使われコンクリートで建てられる外、最近では合製された素材のものもできているようである。

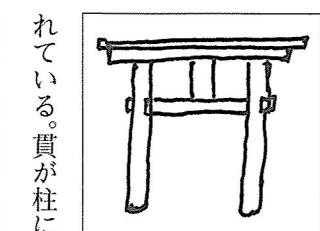
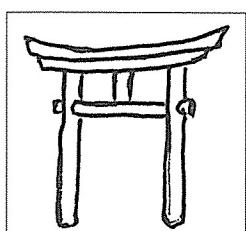
さらに、その形状によつて類別され、その主なるものをあげると、次のように



鹿島鳥居
丸材が中心、貫だけが角材となつてゐる。

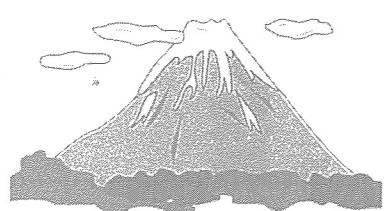


神明鳥居
丸材が用いられ、最も簡素につくられている。



この外、柱の根元に控柱を以て本柱を支えるようになつてゐる両部鳥居がある。これは神仏習合の中で考え出された鳥居といわれる。

鳥居の構造上、立つた柱が、二本とも内側に少し倒れて立つてゐることがある。この倒れ方を「ころび」といつて、柱の頂上で二本の間隔が柱の根元の直径ほど倒れているものを「一本ころび」とい、柱の根元の半分のもの

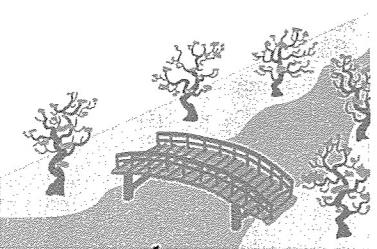


開

鳥居

の

秋山政一



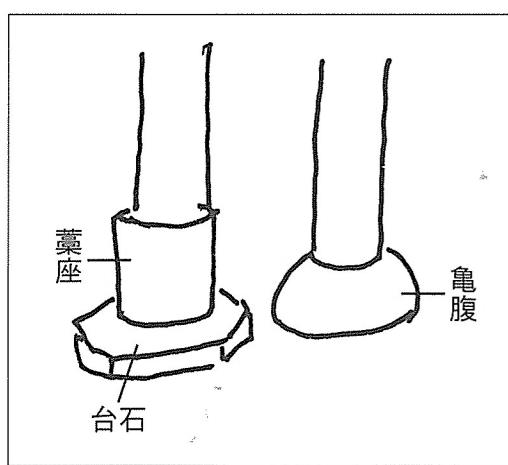
鳥居の鳥木の上に、笠木が屋根のようにふかれていて「額束」が立てられて「額束」が立てられている。貫が柱にさし込まれてゐる。

春日鳥居

鳥居の鳥木の上

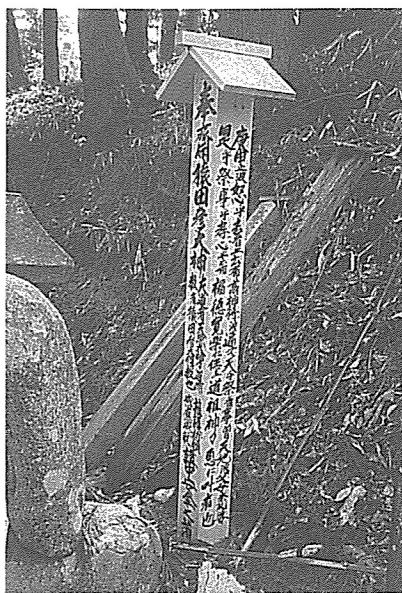
を「半ころび」という。柱が倒れずに立っている力の関係であるといわれている。

さらに、柱の根元は、次のように呼ばれている。



その上、大切な信仰も一緒に守られてきたはずである。

一つ一つの鳥居もこのように注意してみると、祖先が残してくれている文化が一つ一つはつきりと知ることがでできるようである。



塔婆の正面と右側面



塔婆の正面と左側面

正面には
養の木製塔を写真のように見ました。

福島市田沢の入の山神社で、庚申供
と大書し、その下方に、次の二行が書
かれてありました。

奉齋 猿田彦大神
夫道者天照大神乃道而
教者猿田彦大神乃教也

その下方にも、二行に
擁護祈願 感應成就

としてその下方に
平安十二年十二月二十八日講中建之
と一行に書いてありました。

庚申止波怒乎去苗止云布高神待波
遍久天乎祭苗事曾天コトノテン
婆是乎祭事コウシントイフ
仁任豆道祖神乃惠仁叶者也

これは、講中の人たちの祈願の中での一人一人の決心ともいいうべきものであります。

思えば、平成十二年は七回の庚申の年で、大庚申の年がありました。

大庚申は六十年に一度くる珍しい年

であるので、この塔が建てられたものとみられますから、田沢には庚申信仰が昔のままに続けられていることがわかるわけであります。

木製庚申供養塔

加藤重芳





「神の国」の姿をみた

斎藤久一

平成十二年は二十世紀末、森内閣総理大臣の「神の国」発言は世論を沸かせた。

昭和五十七年、わが町会の産土神である、大旦愛宕神社奉贊会の名誉会長に推されていた私は、去年の総会で会長に天下りさせられた。元総理大臣が現職大臣になり下つた、内閣改造人事の先例のようなものである。

会長としての初仕事は、例年のことながら春夏二回の愛宕神社の祭礼と熊野神社の秋の祭礼で、年末年始

としては、社殿と境内の清掃や注連縄・宝前への餅・米・塩・水などを飾り供えることと、元日と二日の参拝者への接待である。

清掃等は暮の三十日役員と一緒に終り、明けて二〇〇一年の新世紀元年の元日は、朝五時から神社の扉を開き、社守として参詣者へ御神酒と甘酒やみかんを振る舞うことが主な仕事である。

境内には、古峯神社・雷神社・庚申塔が三基・馬頭観世音・熊野神社の石祠と行屋・経壇碑・大壇名称起源之碑・昨年建てた「大壇愛宕神社」の標柱等がある。

二日の九時過ぎ接待を終え、鍵持ちもあることから後始末のため、

境内を回つてみたら「おさご」「御賽銭」が、これらの碑前にあげられてあつた。「おさご」は無造作にあげられたので回収不能。小鳥の餌が適當だらうと、そのまま放置。御賽銭は五百円・五十円・十円・五円・一円で、多いのは十円五円と一円である。ところが、十円以上は心ない小中学生たちが持ち去つた実例もあつたというので、全部あつめて本堂の御賽銭箱に收め施鍵して正月行事を終えた。

それにもしても、経壇碑・大壇名称起源之碑・神社の標柱にまで「おさご」や御賽銭があげられていたことは、些か驚ろかされた。

およそ三百五十余戸のわが町会だが、産土神への信仰が根強く生きていることを強く感じられた。「いしぶみ」にまで及ぶ信仰心の深さである。

今年で大壇開基以来三八三年、愛宕神社創建以来二三二年を迎える。その間、このような行事が続けられてきたということは、神を敬い祖先を崇め奉ることによつて、安心立命の境地をもつて生活し、それを繋いできた美しい伝統的精神性文化というものを感じさせられ、これ

が生活の伝承といいうものであろうと、心が和む思いで年末年始の役目を終えた。

御賽銭の総額がいくらになるのかは、十四日小正月の松送りの後、どんじ焼きの時に楽しみにしている。

「神の国」がなぜいけないのか。新世纪もわが国日本は「神の国」でありたいものである。



四十代から八年余り仙台に住んだ。転勤族の町と言われる仙台では各地の方言を耳にした。共通語の中に国語が混じり出身地が見えてくることが多く、私もおとなしげな語尾の弱い話し方だから福島と間もなく言い当てられた。

ある日近くにある県立図書館で、土井八枝著の仙台弁を書いた本に出来た。二高の教授となつた夫の土井晩翠と共に仙台へ移り住んだ四国生まれの著者は、この土地の訛に大そう驚く。女中に「酢」と言いつけたのに「塩」を買つてきた等々あり、東北人は口の中が違うのでは、と思う程驚き困惑したという。そして以後、言葉や会話を聞く度に丹念に書きとめ調べて一冊にまとめ上げた。書名は「仙壹の方言」だつたろうか。私が借りた頃は年数がたち古びていたが、詳細に記述されているやや大型の本で、著者の熱意と知

りて学んだ。
同じ頃スズキ・ヘキの詩集を読み、純粹であたたかい童詩の数々に心をうたれる。当時のメモの中からその一篇を記す。

ユキムシホー テブクロ

ユキムシホー ユキムシホー
オラナド テブグロ カツテモラツタ

ユキムシホー ユキムシホー
アガインナ ケイドンナ カツテモラツタ

ユキムシホー ユキムシホー
ユキヤギ イデアドツテ ナイダベヤ

ユキムシホー ユキムシホー
テブグロ ネエドツテ ナイタベヤ

四十代から八年余り仙台に住んだ。

性に感心しながら、折にふれ幾度か借りて学んだ。

ユキムシホー ユキムシホー
ミルヒト オモニサ コライバヨ

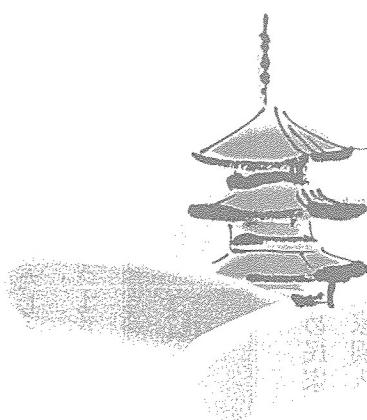
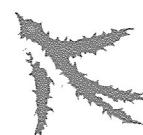
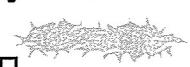
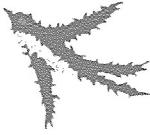
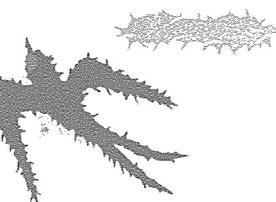
ユキムシホー ユキムシホー
アガインナ オランナ ミサイバヨ

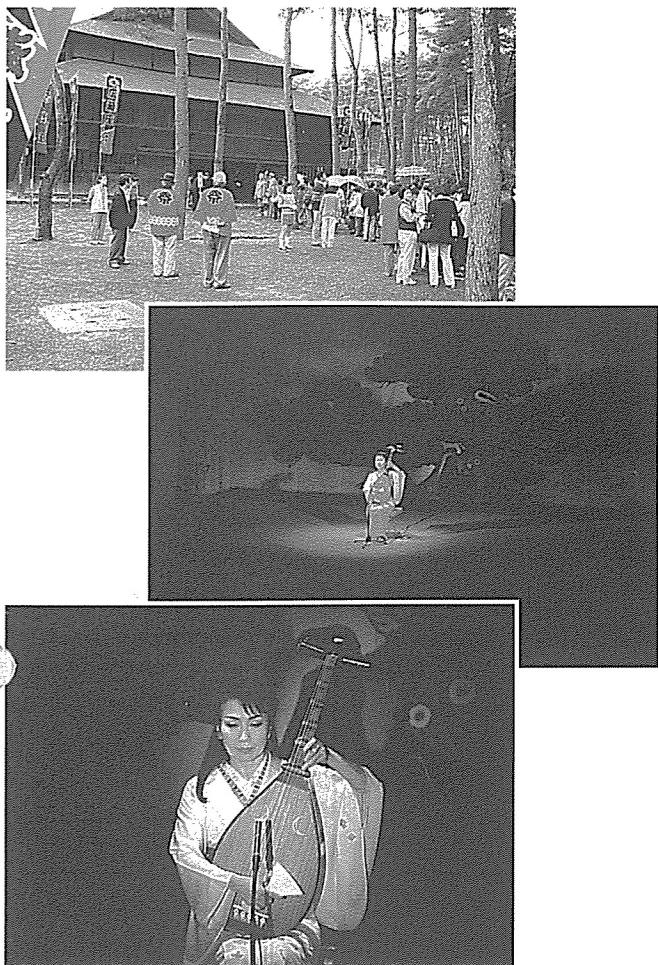
作者へキは自分でふしをつけ愛唱していたという。仙台の詩人スズキ・ヘキ（本名栄吉）、一九七三年七十四歳で没、終る日まで詩・童謡を作つたと伝えられる。他に、断片的な記憶だけれど、ユーヤケボーッボーン、カアラスゼンゼンオトシタトヤア、タネデタネデモゼニネエドヤアやワンガマワシティッタツタなども懐かしい。民家園の草屋根に下がつた薄茶色のつららを見た時は、タロヒツンツラハネオリロ、ソレ、キカイタイソデハネオリロなど思い出しほのぼのとした。そして、方言の渦の中だつた遠い日の光景が胸

方言の思い出

角田セツ

に甦り少し感傷にふけつた。
時代や社会の変遷の中で言葉が変わり方言の状況も変わってゆく。私も生活の変化で他地方との行き来がふえ共通語を交えることが多くなつた。でもつれづれ口にするのは生來の福島ことば、敬語ていねい語を忘れず粗野な言い方をせず、大切に福島ことばを話しつけていきたい。





平成十二年度 旧広瀬座活用事業

「筑前琵琶演奏家

上原まり演奏会

平成十二年五月二十一日、旧広瀬座において筑前琵琶演奏家上原まり演奏会が行われました。旧広瀬座の今後の活用のありかたの一つとして企画されたもので、上原まりさんが、四・二倍の抽選による当選者と招待者合わせて四三三人（二回公演）の観衆に、演目「平家物語の世界」を解りやすく弾き語り、好評のうちに終了することができました。

今後は、旧広瀬座活用計画検討懇談会からの提案を取り入れながら活用計画を策定し、それに基づき、整備・活用を行っていく予定ですので、引き続きご指導ご協力くださいますようお願い申し上げます。

